

平成 30 年 5 月 2 日現在

機関番号：62501

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26284091

研究課題名(和文) 琉球帝国と東アジア海域の動態研究 - 集落・流通・技術 -

研究課題名(英文) The study of Ryukyu empire and East Asia area of sea -village, circulation and technology-

研究代表者

村木 二郎 (Muraki, Jiro)

国立歴史民俗博物館・大学共同利用機関等の部局等・准教授

研究者番号：50321542

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 12,600,000円

研究成果の概要(和文)： 中世琉球を先島・奄美など周辺地域から描くことで新たな歴史像を提示することを目的とした。文献史料の少ない当該地域を扱うために、考古資料を蓄積することとした。具体的には、中世集落遺跡の測量図作成 - 波照間島ミシュク村跡遺跡、同一基準による出土陶磁器全点カウント - 喜界島城久遺跡群大ウフ遺跡・手久津久遺跡群中増遺跡、宮古島住屋遺跡・ミヌズマ遺跡、石垣島フルストバル遺跡、竹富島新里村遺跡を実施した。

これらのデータをもとに新たな琉球史像を提示し、喜界町での「シンポジウム 中世の喜界島を考える」(2016年度)、那覇市での「シンポジウム 琉球帝国という視点」(2017年度)などを通じて、情報発信した。

研究成果の概要(英文)： We drew medieval Ryukyu from a circumference area - Sakishima and Amami. And a new history image was shown. There were little document historical sources which make this area the subject, so it was emphasized to accumulate archaeology material. Specifically, a measurement investigation of a medieval colonial vestige - Haterumajima Mishuku village remains and classification investigations of chinaware - Kikaijima Gusuku ruins, Tekuzuku ruins, Miyakojima Sumiya ruins, Minuzuma ruins, Ishigakijima Furusutobaru ruins, and Taketomijima Shinzatomura ruins were put into effect.

A new history image in Ryukyu was indicated based on these data. We held symposiums "Medieval Kikaijima" (in Kikai town, 2016) and "The angle as the Ryukyu empire" (in Naha city, 2017) and informed people.

研究分野：日本中世考古学

キーワード：琉球 中世考古学 集落 陶磁器 流通 先島 奄美 東アジア海域

### 1. 研究開始当初の背景

従来、琉球王国は明の冊封体制のなかで中継貿易国家として存立したが、ヨーロッパ勢力のアジア進出によって存在感が弱まり、日本に統一政権が成立すると、その尖兵である薩摩の侵攻を受けて支配下に入った、という受動的なトーンで語られがちであった。しかし、昨今の研究では、この時代を作った琉球王国は、諸外国との複雑かつ柔軟な外交交渉を通して巧みな交易活動を積極的に展開したことがわかっている。東南アジア諸国とは対等な関係を作り上げ、南九州の諸勢力に対しては時には弱味に付け込んで優位な関係を築きもしている(村井章介「古琉球をめぐる冊封関係と海域交流」2011年)。

そして何より、琉球とは異なった文化をもつ奄美諸島や、宮古、八重山といった先島諸島に侵攻し、支配したのである。のちに奄美は薩摩に割譲されて現在は鹿児島県に含まれるが、先島諸島は近世も琉球王府の支配下にあり続けて現在の沖縄県域に至っている。そのためか、先島に関しては所与のものとして琉球領土と認識されており、1500年に八重山で起こったオヤケアカハチによる蜂起も“反乱”、“鎮圧”と表現される。しかし、戦後に米軍が日本を支配した際、琉球とは別に、奄美、宮古、八重山を個別に群島支配したように、これらの地域は琉球とは異なる独立した文化圏であり、強権をもった時代の琉球帝国によって版図とされたのである。

本研究では、こういった視点で琉球を新たに位置づけ直し、中世後半の東アジア海域を捉えることで、従来とは異なった歴史像を描いてみる。

### 2. 研究の目的

14~16世紀の東アジア海域では、世界史の中の大航海時代以前から、すでに活発な交易がおこなわれていた。その立役者は琉球王国である。大明帝国は海禁政策を建て前としたために自由な貿易ができず、冊封体制下にある琉球王国に貿易公社としての役割を担わせた。これを逆に、琉球は明と東南アジア諸国、朝鮮、そして日本をつなぐパイプ役として積極的な交易活動を展開し、「大交易時代」を現出したのである。

この間、琉球王府は異なった文化をもつ奄美諸島や、宮古、八重山といった先島諸島に侵攻し、中央集権的な体制で支配した。それによって先島諸島の中世集落の構造は一変し、領主層を頂点とした個別権力体が解体したと考えられる。琉球の帝國的側面はこれまで触れられなかったが、先島に残る集落遺跡の構造や、威信財などの出土資料を検討することで、文献史料の希薄な当該地域の動態や琉球王国の実態を解明する。

また、これまで文献史料や陶磁器を中心に東アジア海域の交易が語られてきたが、胡椒や漆器素材、技術などさまざまな分野の交流を証明する方法が確立されてきた(村木二郎

編『時代を作った技 - 中世の生産革命 - 』2013年)。そういった具体的なモノ資料の分析によって、中世の東アジア海域における文物の複雑な動きを捉える。

集落構造や流通、技術といった新たな視点を通して、考古学、文献史学、民俗学、分析化学等の手法により総合的に分析し、琉球の帝國的側面に注目しながら中世後半の東アジア海域における多様な人、モノの動態を捉え、世界史の中に位置づけた新たな歴史像を描くことを目的とする。

### 3. 研究の方法

文献史料に残らないためこれまでほとんど注目されてこなかったが、宮古、八重山といった先島諸島には多くの中世集落遺跡が存在する。海岸に面した隆起珊瑚礁の崖上に立地し、2~3メートルの高い石垣を巡らして防御し、さらに内部にも石垣で区画された多数の不整形な屋敷群が集合している。先島の集落は近世以降は道路に沿った方眼の屋敷割が施されて現在に至るが、それ以前は全く異なる村の姿があったのである(小野正敏「先島の集落」2010年)。その特徴は、村の中に道路をもたず、不整形、非均質な屋敷の集合体で、最も大きな屋敷を核として同心円的に大小の屋敷が付属することである。核となる屋敷跡からは富や権威を象徴する威信財である天目茶碗や青磁酒海壺などの高級な唐物陶磁器が出土している。集落内に存在した領主権力を中心に、空間構造や屋敷の格差によって身分関係が視覚的に捉えられるのである。

これらの村の多くは14世紀頃に出現し、16世紀初頭には廃絶している。この14~15世紀の先島地域は、村立て英雄の伝承にあらわれる領主間抗争の時期であり、さらには琉球王府による侵攻を受けて版図に組み込まれていく戦乱の時代である。すなわちこれらの村は、琉球帝国の版図に入る以前の、独立した権力体が存在していた先島に固有の集落であり、まさに東アジア海域の多用な生活文化と琉球帝国の動態を示す基礎的な資料となる。

そこで、本研究では奄美・先島の集落遺跡に注目し、これらの遺跡を踏査するとともに、出土した陶磁器を分類・カウントし、考古学的資料を蓄積する。そして、それらの新しい資料をもとに琉球を周辺域から描き直すことで、これまで文献史料から語られてきた琉球史とは異なった歴史像を提示する。

### 4. 研究成果

文献史学を中心に、研究の進展が著しい古琉球史を総合的に取り扱うにあたり、まずは文献史学・考古学の研究史を把握して問題点を探ることを重視した。そのうえで、本研究組織独自にオリジナルデータを蓄積することで、奄美・先島から琉球を見つめなおすことが有意義であることを認めた。

具体的に、オリジナルデータは研究代表者・分担者・協力者による 中世集落遺跡の測量図作成、同一分類基準による出土陶磁器全点カウント、によって積み上げることとした。

中世集落遺跡としては、比較的遺存状態が良好であった竹富町波照間ミシユク村跡遺跡を選んだ。平板測量により 200 分の 1 の図面を作成することとし、3 年間かけて完成させた。

陶磁器調査は、奄美地域では喜界町城久遺跡群大ウフ遺跡、同手久津久遺跡群中増遺跡、先島地域では宮古島市住屋遺跡、同ミヌズマ遺跡、石垣市フルストバル遺跡(1・2・3・4・5・10・15号住居跡)、竹富町新里村遺跡(東・西)出土資料を対象としたほか、沖縄県立博物館・美術館所蔵ジョージ・H・ケア氏採集資料等も参考資料として実施した。

調査と併行して、国立歴史民俗博物館および沖縄県等で研究会を 8 回開催した。研究会では、オリジナルデータをもとに先島の集落の特徴、琉球周辺域の陶磁器様相を検討し、具体的資料に根差した新たな琉球史像を提示した。それらは、喜界町での「シンポジウム 中世の喜界島を考える」(2016 年度)、那覇市での「シンポジウム 琉球帝国という視点」(2017 年度)を通じて、研究会外部の研究者にも情報発信し、共に議論することができた。個別研究としては、研究組織メンバー全員から合計 35 本の研究報告があった。

これらの調査・研究成果の詳細については『国立歴史民俗博物館研究報告』にまとめて刊行する。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 34 件)

1. 池田榮史「沖縄における窯業史研究の到達点と課題」『那覇市立壺屋焼物博物館紀要』19, pp.45-54、査読無、2018 年
2. 池田榮史「日本における水中遺跡調査研究の現状」『水中遺跡の歴史学』pp.13-42、査読無、2018 年
3. 齋藤努「津久井城出土金粒かわらけと小田原城出土金箔かわらけ等の主成分分析結果」『国立歴史民俗博物館研究報告』210、pp.153-169、査読有、2018 年
4. 齋藤努「加治木銭鑄銭所跡出土資料の鉛同位体比分析結果」『始良市埋蔵文化財発掘調査報告書』7, pp.295-299、査読無、2018 年
5. 齋藤努「国分銅山資料の鉛同位体比分析結果」『始良市埋蔵文化財発掘調査報告書』7, pp.164-166、査読無、2018 年
6. 齋藤努「日本刀の刀身を作る」『歴史研究と総合資料学』pp.148-167、査読無、2018 年
7. 齋藤努「考古学と自然科学との関わり」『国立歴史民俗博物館研究叢書』3, pp.1-11、査読無、2018 年
8. 齋藤努「日韓の青銅器と原料の産地推定」

- 『国立歴史民俗博物館研究叢書』3, pp.12-40、査読無、2018 年
9. 関周一「中世日本における外来技術伝来の諸条件」『国立歴史民俗博物館研究報告』210、pp.237-259、査読有、2018 年
10. 関周一「中世の国際交流から生まれた子どもたち」『歴史評論』815, pp.15-28、査読有、2018 年
11. 関周一「東シナ海と倭寇」『生活と文化の歴史学』10, pp.322-355、査読無、2018 年
12. 中島圭一「十五世紀生産革命論再論」『国立歴史民俗博物館研究報告』210, pp.223-235、査読有、2018 年
13. 松田睦彦「現役石材採掘職人が見た大坂城石垣石丁場跡」『国立歴史民俗博物館研究報告』210, pp.171-185、査読有、2018 年
14. 村木二郎「中世京都七条町・八条院町界限における生産活動」『国立歴史民俗博物館研究報告』210, pp.49-83、査読有、2018 年
15. 池田榮史「奄美諸島における土師器甕形土器」『南島考古』36, pp.211-222、査読無、2017 年
16. 池田榮史「琉球列島出土の滑石製石鍋破片について」『琉球大学法文学部人間科学科紀要人間科学』37, pp.169-188、査読無、2017 年
17. 池田榮史「三別抄と日本への蒙古襲来、そして琉球」『韓国国立済州博物館特別展「三別抄と東アジア」図録』pp.266-277、査読無、2017 年
18. 齋藤努「竹松遺跡出土湖州六花鏡の鉛同位体比分析結果」『新幹線文化財調査事務所調査報告書』5, pp.295-299、査読無、2017 年
19. 佐伯弘次「平方吉久考」『博多研究会誌』14, pp.33-41、査読無、2017 年
20. 関周一「中世東アジア海域と日朝関係」『日朝関係史』pp.89-176、査読無、2017 年
21. 松田睦彦「『人類学雑誌』に見る柳田国男の関心」『国立歴史民俗博物館研究報告』202, pp.285-312、査読有、2017 年
22. 村木二郎「経塚出土文字資料と考古学的視点」『考古学と中世史研究』13, pp.123-143、査読無、2017 年
23. 関周一「海域交流の担い手 倭人・倭寇」『九州歴史科学』44, pp.79-101、査読無、2016 年
24. 中島圭一「中世的生産・流通の転回」『十四世紀の歴史学』pp.351-372、査読無、2016 年
25. 村木二郎「擬漢式鏡からみた和鏡生産の転換」『十四世紀の歴史学』pp.373-390、査読無、2016 年
26. 村木二郎「国家を超えた中世の日朝交流」『歴博』195, pp.2-5、査読無、2016 年
27. 村木二郎「八重山・宮古の英雄時代と「琉球帝国」」『歴博』194, pp.2-5、査読無、2016 年
28. 関周一「彼我を行き交うモノ」『日明関係史研究入門』pp.375-439、査読無、2015 年

29. 関周一「倭寇と倭寇図像をめぐる研究集会報告総括コメント」『東京大学史料編纂所紀要』25、pp.132-139、査読無、2015年
30. 中島圭一「中世における生産の二つの画期」『中世を終わらせた「生産革命」』pp.1-6、査読無、2015年
31. 松田睦彦「人の地域移動の日常性をめぐる民俗学史的考察」『国立歴史民俗博物館研究報告』199、pp.11-34、査読有、2015年
32. 佐伯弘次「対馬の砥石」『中世の対馬』pp.189-201、査読無、2014年
33. 佐伯弘次「対馬における古文書探訪と中世文書」『中世の対馬』pp.266-279、査読無、2014年
34. 村木二郎「中世鑄造遺跡からみた鉄鍋生産」『考古学と中世史研究』11、pp.181-202、査読無、2014年

〔学会発表〕(計23件)

1. 池田榮史「三別抄と日本、琉球」『2018 東アジア三別抄学術大会「東アジア三別抄、高麗海洋国家を夢見る(国際学会)」』2018年
2. 関周一「中世の韓日関係史研究の争点と史料」『東北亜歴史財団(国際学会)』2018年
3. 池田榮史「琉球列島における古代末～中世の在地土器研究の現況」『第7回中世東アジア海域における琉球の動態に関する総合的研究共同研究会』2017年
4. 岡本弘道「琉球王国の活動と拡大と「人の動き」」『第7回中世東アジア海域における琉球の動態に関する総合的研究共同研究会』2017年
5. 齋藤努ほか3名「山口県を中心とした鉱山・遺跡資料の高精度鉛同位体比分析」『日本文化財科学会第34回大会』2017年
6. 齋藤努「鉛同位体比からみた青銅器原料の産地」『明治大学リバティアカデミー 2017年度春期 第60回明治大学博物館公開講座考古学ゼミナール 青銅器はどこまで明らかになったか』2017年
7. 齋藤努「高精度鉛同位体比分析でみた青銅原料の産地」『総研大文化フォーラム 2017文化をはかる - 文化科学へのまなざし -』2017年
8. 佐伯弘次「日朝関係研究史 - 朝鮮前期 -」『韓日関係史学会(国際学会)』2017年
9. 佐伯弘次「博多の支配と都市住民」『中世都市研究会大会』2017年
10. 松田睦彦「民俗学・人類学的記録に見る八重山のムラ」『第7回中世東アジア海域における琉球の動態に関する総合的研究共同研究会』2017年
11. 村木二郎「琉球帝国とは - 周辺からみた琉球 -」『シンポジウム「琉球帝国という視点」』2017年
12. 村木二郎「琉球帝国を語る要件」『第7回中世東アジア海域における琉球の動態に関する総合的研究共同研究会』2017年
13. 池田榮史「考古学における古琉球研究の現状と課題」『第4回中世東アジア海域にお

ける琉球の動態に関する総合的研究共同研究会』2016年

14. 岡本弘道「琉球王国の海上交流史をめぐる現状と課題」『第3回中世東アジア海域における琉球の動態に関する総合的研究共同研究会』2016年
15. 佐伯弘次「博多商人道安と「琉球国図」」『第6回中世東アジア海域における琉球の動態に関する総合的研究共同研究会』2016年
16. 関周一「『朝鮮王朝実録』にみえる奄美諸島と先島」『第6回中世東アジア海域における琉球の動態に関する総合的研究共同研究会』2016年
17. 中島圭一「北方からみた琉球王国の形成」『第6回中世東アジア海域における琉球の動態に関する総合的研究共同研究会』2016年
18. 村木二郎「中世における琉球と喜界島」『シンポジウム「中世の喜界島を考える」』2016年
19. 村木二郎「考古学からみた中世日本の技術」『アントロポシーンにおける博物館(国際学会)』2016年
20. 佐伯弘次「十五世紀の日琉関係と博多商人」『第1回中世東アジア海域における琉球の動態に関する総合的研究共同研究会』2015年
21. 関周一「古琉球研究の現状と課題」『第1回中世東アジア海域における琉球の動態に関する総合的研究共同研究会』2015年
22. 村木二郎「中世日本の技術と生活」『2015博物館・物件・文化的詮釈と溝通系列過程』『生活的展示：生活物件と生活方式(国際学会)』2015年
23. 村木二郎「中世日本の生活と技術」『2015年「東亜地震歴史と物質文化展示」博物館交流工作坊(国際学会)』2015年

〔図書〕(計4件)

1. 齋藤努編『国立歴史民俗博物館研究叢書 3 青銅器の考古学と自然科学』全168頁、朝倉書店、2018年
2. 村木二郎編『国立歴史民俗博物館研究報告 272 中世の技術と職人に関する総合的研究』全272頁、国立歴史民俗博物館、2018年
3. 関周一編『日朝関係史』全386頁、吉川弘文館、2017年
4. 関周一『中世の唐物と伝来技術』全248頁、吉川弘文館、2015年

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

村木 二郎 (MURAKI Jiro) 国立歴史民俗博物館・研究部・准教授、50321542

### (2) 研究分担者

池田 榮史 (IKEDA Yoshifumi) 琉球大学・法文学部・教授、40150627

岡本 弘道 (OKAMOTO Hiromichi) 県立広島大学・人間文化学部・准教授、70469237

齋藤 努 (SAITO Tsutomu) 国立歴史民俗博物館・研究部・教授、50205663

佐伯 弘次 (SAEKI Koji) 九州大学・人文科学  
学研究院・教授、70167419

関 周一 (SEKI Syuichi) 宮崎大学・教育文  
化学部・准教授、30725940

中島 圭一 (NAKAJIMA Keiichi) 慶応義塾大  
学・文学部・教授、50251476

松田 睦彦 (MATSUDA Mutsuhiko) 国立歴史  
民俗博物館・研究部・准教授、40554415

(3)連携研究者

なし

(4)研究協力者

池谷 初恵 (IKEYA Hatsue) 伊豆の国市教育  
委員会・文化財調査員

岩元 康成 (IWAMOTO Yasunari) 始良市教育  
委員会・主事

小野 正敏 (ONO Masatoshi) 国立歴史民俗  
博物館・研究部・名誉教授

久貝 弥嗣 (KUGAI Mitsugu) 宮古島市教育  
委員会・主事

栗木 崇 (KURIKI Takashi) 熱海市教育委員  
会・学芸員

小出 麻友美 (KOIDE Mayumi) 早稲田大学・  
グローバルエデュケーションセンター・講師

佐々木 健策 (SASAKI Kensaku) 小田原城総  
合管理事務所・主査

鈴木 康之 (SUZUKI Yasuyuki) 県立広島大  
学・人間文化学部・教授

田中 大喜 (TANAKA Hiroki) 国立歴史民俗  
博物館・研究部・准教授